



●Answer
 帰依 龍照(きえりゅうしょう)
 沖縄市・コザ山球陽寺住職

Q 今年の夏、祖父の三十三回忌があります。お金を包む袋は、黒と赤のどちらの水引が付いているものを選びたいですか？ また、袋の表には、なんと書けばいいのでしょうか？

(西原町・Sさん)

A 法事と袋の意味
 沖縄の「ウスコー

(法事)は、三十三回忌で終わりますので、ご供養の思いもひとしおですね。

お金を包む袋は、一般的に金封(きんぷう)といいます。Sさんのご質問にもありますように、金封には、大きく分けて、黒色の水引が掛けられた「不祝儀袋」と、赤色の水引の「祝儀袋」があります。

三十三回忌は法事なので、故人を供養する意味から考えますと、不祝儀袋を準備するのが一般的でしょう。

一方、前述のように沖縄では、三十三回忌を「最後のウスコー」ととらえる慣習があり、「ウワイスコー(終焼香)」と呼ぶ地域や家庭もあります。三十三回忌で故人が成仏(じょうぶつ)され、また、家族や親族にとつても、故人を最後までキッチンと供養できたという満足の気持ちを表現する意味で、祝儀袋を準備される方もいらっしゃいます。

祝儀袋には、たいいてい「熨斗(のし)」がついています。熨斗は、もともと「鮑(あわび)」を薄く削って乾燥させた「熨斗鮑(のしあわび)」を表し、長寿を表現する縁起物ともいわれています。このことから、熨斗のついた祝儀袋を使う場合は、熨斗を外してから、ご仏前にお供えするよう心がけるとよいでしょう。

もつとも、シンプルに「不祝儀袋、祝儀袋、どっち？」

と質問されれば、不祝儀袋の方が無難かと思われ、沖縄の法事では、魚の天ぷらや豚三枚肉を使った重箱とは別に、精進料理を用意する家庭が多いと聞きます。鮑という海産物が関係する熨斗のついた祝儀袋ではなく、肉や魚を遠慮するということの意味でも、不祝儀袋の使用が望ましいと言えそうです。

袋の表に書く言葉

表に書く文字のことを「表書き」といいます。三十三回忌の場合、表書きには「御仏前(ごぶつぜん)」が望ましいかと思えます。

ほかに「御香典(ごこうでん)」「御霊前(ごれいぜん)」と書くという選択肢もあります。御香典とは、「献花(けんか)」「献茶(けんちゃ)」「献香(けんこう)」「献茶(けんちゃ)」「献水(けんすい)」といった、

本来、お供えする生花や抹香(まっこう)、線香、ウチャト(御茶湯)の代わりとしてお供えする金銭全般のことを指します。その意味では、「御仏前」「御霊前」も、「御香典」に含まれます。しかし現在、御香典は葬儀や告別式の金封の代名詞のように使われることが多いので、三十三回忌の表書きには使用しないのが無難かと思えます。

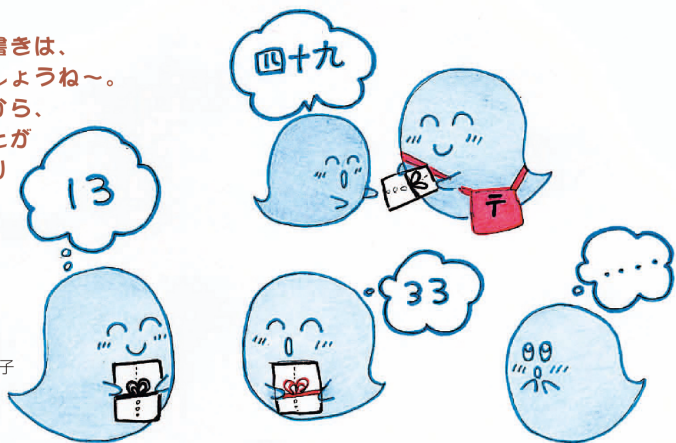
「御霊前」は、仏式の場合、シンジュークニチ(四十九日)以降、故人が成仏するという考え方から、ハチナシカ(初七日)からシンジュークニチまでのナンカ(七日)の期間のみ使用する表書きとするのが一般的です。

沖縄では、十三回忌までの法事は、重箱に「シルムチー」白餅(しろもち)、「白蒲鉾(しろかまぼこ)」を用意してお供えする、「ワカスコー(若焼香)」の期間であるという地域や家庭もあります。このことから、「御霊前」と表書きするのは、十三回忌までという地域や家庭もあります。

今回のご質問である三十三回忌は、「四十九日」「十三回忌」を経過していますので、「御仏前」の使用が望ましいかと思えます。なお、浄土真宗本願寺派のように、本来「御霊前」という文言を使用しない宗派もあるこ

とを追記しておきます。金封をご仏前にお供えするとき、仏壇側から文字が読めるように向ける慣習が沖縄にはあります。県外から養子で沖縄に来た私は、当初、この慣習に心から感動しました。喪主のおばあちゃんが、「あつちから読めるようにしておかんと、グソー(後生)のおじいが見たとき、誰が御仏前をウサゲたのか、分からんさーね」と笑顔で話される姿を拝見しました。先立たれたご主人を思いやる心に、住職として私が沖縄で学ぶことは、本当にたくさんあるんだなーと、深く思い知らされたものです。

不祝儀袋の表書きは、薄墨で書きましょうね。ハタでもいいから、自分で書くことが供養につながりますよ。



イラスト：帰依ひろ子